

家庭訪問型子育て支援の充実と発展について

～ホームスタートというボランティアの実践を通して考える～



氏名 市村 彰英 教授
 所属 社会福祉こども学科
 URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=192ichi>
 研究分野 家族臨床心理学, 非行臨床心理学, コミュニケーション, 悪循環と好循環の分析
 キワード ホームビジター、傾聴、協働、児童虐待、グループワーク、家庭訪問、子育て支援

■ 研究シーズの概要

<研究概要> 1

子育て支援には子育てサロン、子育て広場など、子育てをする母親たちが集まる拠点が設けられている。孤立感の強い母親たち（以下「利用者」と記す）は、その場所にまで足を運ぶことができない。そこで必要とされるのが家庭訪問型子育て支援（ホームスタート：以下「HS」と記す）というボランティア団体のサービスである。ネットやビラなどでこの存在を知った母親たちは、ネットや電話などで連絡をしてくる。とりまとめ役であるオーガナイザー（以下「OG」と記す）が連絡のあった利用者宅に足を運び、事情を伺い、訪問担当するホームビジター（以下「HV」と記す）を選び、最初はペアで家庭訪問し、その後1～2週間ごとに4回訪問する。HVはその間に利用者たちに傾聴と協働を繰り返し、利用者たちは子育て支援の拠点につながったり、必要な行政サービスなどを受けられるようになっていく。このHSシステムの有効性を質的機能的に分析し、保健医療福祉分野である病院、保健センター、市役所子育て支援課、保育所、児童相談所などの今後の有効な子育て支援の協働の在り方を考えていきたい。

<研究概要> 2

子育て支援というと母親支援をイメージするが、児童虐待の半数は実母であるが、4分の1は実父である。私は15年に亘ってわが子を虐待してしまった父親たちのグループワークを行い、虐待の起こる父子の関係が変わり、連動して夫婦関係や家族関係が変化していく。マザー＆チャイルドグループ（通称MCG）は保健センターなどでよく施行されているが、父親グループは東京と大阪で行われている以外に続いているところが少ない。このような取り組みができるようなシステムを構築し、子育て支援、児童虐待防止につながっていく試みを目指したい。

■ 共同研究のご提案

<1> 家庭訪問型子育て支援と保健医療福祉分野の協働について

<2> 虐待をしてしまった父親たちのグループワークについて

■ 研究テーマ

- ・家庭訪問型子育て支援に関する研究
- ・虐待をしてしまった父親たちのグループワークにおける支援に関する研究
- ・被虐待児が非行に至るプロセスの研究

